

上級日本語学習者による 形容詞及び述語名詞中止形の使用状況

— 「YNU 書き言葉コーパス」の調査を通じて—

宮崎 聡子

キーワード：上級日本語学習者、形容詞、名詞、中止形、作文コーパス

1. はじめに

従来、用言の中止形については動詞を中心に多くの研究がなされてきており、仁田（1995）による「付帯状況」、「継起（時間的継起・起因的継起）」、「並列」の三類四種は広く知られている。一方、動詞以外の静的述語、すなわち形容詞や述語名詞の中止形についての研究は立ち後れていたが、津留崎（1999、2000、2003a）の一連の研究により、動詞とは異なる、静的述語の中止形が表す関係の意味が明らかにされてきた。

日本語教育においても、中止形については、動詞のいわゆる「て形」「連用形」の用法に重きが置かれ、形容詞や述語名詞の中止形は、初級の段階では例文(1)(2)のように、「並列」「原因」の用法のみが紹介されている。

- (1) a. この部屋は広くて、明るいです。
b. 奈良は静かで、きれいな町です。
c. カリナさんはインドネシア人で、富士大学の学生です。
(『みんなの日本語Ⅰ』第16課)
- (2) a. 問題がむずかしくて、わかりません。
b. 説明がふくざつで、わかりません。
c. 地震でビルが倒れました。
(『みんなの日本語Ⅱ』第39課)

(2)c. は、述語名詞の中止形ではなく「名詞+格助詞デ」の用法である。述語名詞の中止形が「原因」を表すのは、「彼女は優等生で、奨学金をもらっ

ている。」のような文であるが、このようなタイプは提示されていない¹⁾。そして、中級以降は文法項目として取り上げられることはほとんどなく、読解教材等において、いわば学習者による自然習得に任される部分が多い。

本稿では、従来あまり明らかにされていない日本語学習者による静的述語（イ形容詞・ナ形容詞・述語名詞）の中止形の使用について、日本語母語話者との比較対照が可能な「YNU 書き言葉コーパス」を用いて調査を行い、その傾向と特徴を明らかにする。

2. 先行研究

2.1 日本語学における研究

日本語学において、形容詞・述語名詞の中止形について研究したものは動詞の中止形に比べ非常に少なく、上述の津留崎（1999、2000、2003a）が代表的なものであるといえる。これらにおいては、中止形の関係的意味の成立には品詞性とその要因として深く関わるがゆえ、その全体像を明らかにするためには、動詞のみならず形容詞や述語名詞など静的述語についても品詞ごとに検証することが必要である、という主張が一貫してなされている。そして小説の用例をデータとし、形容詞及び述語名詞の中止形が担う関係的意味には、「並列」「前提」「先行事態」「原因」「注釈」「解説」「評価」「副状態」の8種があることを明らかにしている。

品詞ごとの特徴としては次のようなことが指摘されている。まず、述語名詞については、名詞述語文の多くは特徴を表す文であるため、その中止形も特徴を表すのが基本的であるが、述語性が弱まると解説や評価などの陳述成分に変化したり、また後続する動詞の表すデキゴトの先行事態や副状態を表したりもする（津留崎 1999）。ナ形容詞の中止形については、動詞が修飾成分になるものが多いのとは対照的に、陳述成分になるものが多いとしている。その理由は、形容詞という品詞に語り手の「判断」の要素が大きく入り込むためである。また、述語名詞の中止形と特徴が似るところもあるが、形容詞は程度性を持つため、述語名詞にはない比較表現が現れるという相違点がある（津留崎 2000）。イ形容詞の中止形については、「ク中止形」「クテ中止形」という二つの形式の使い分けも分析の観点に加え、運動を表さない形容詞は先行事態を表す例は少なく、語り手の心的態度を表す成分に近い「注釈」「解説」「評価」などを表す例があるとしている（津留崎 2003a）。

津留崎氏の関係の意味の枠組みは、動的述語と静的述語の両方を視野に入れた包括的・体系的なものである。これにより、動詞の中止形が「先行事態」や「副状態」という関係の意味が中心になるのに対し、静的述語の中止形は、動詞ではあまり注目されていなかった「前提」や、「注釈」「解説」「評価」といった関係の意味を担うということが明らかになり、研究が大きく進んだと言える。

2.2 日本語教育における研究

まず、静的述語の中止形の指導法について問題提起をしているものとして、津留崎 (2003b) がある。ここでは、初級教科書における形容詞や述語名詞の中止形の扱いについて、動詞中止形の表す関係の意味にあてはまる用法のみが取り上げられていると指摘している (p. 145)。例えば、中級教材の本文に出てくる「招待状も、二人の気持ちを伝える大変いいもので、二人がにこにこしながら「来てくださいね」と言っているようだった。」(『テーマ別中級から学ぶ日本語』第2課) という例は、先行句節が後続節の印象を先にまとめて述べる「注釈」の用法であるが、特に何の文法的説明もなされていない。この点に関し津留崎は、学習者は「習うより慣れろで、経験によって理解していく」(p. 151) ことになるとし、教育上の問題であると指摘している。

津留崎 (2003b) の問題提起をもとに、日本語学習者の作文コーパスをデータとし、イ形容詞の使用状況について報告したものとして、宮崎 (2016) がある。ここでは、「YNU 書き言葉コーパス」を調査対象とし、関係の意味及び作文タスクの種類の観点から、「ク中止形 (大きく)」「クテ中止形 (大きくて)」の二形式の使い分けについて分析を行っている。その結果、どのような関係の意味で使用しているかについては、上級日本語学習者と母語話者の使用率に大きな違いは見られないこと、その一方で、学習者は、読み手が「親 (友人)」の場合は「クテ中止形」を、「疎 (目上)」の場合には「ク中止形」を多用しており、形式を意識的に使い分けていること、しかし母語話者と比較すると明確な使い分けには差があること、が報告されている。

本稿では、以上の先行研究を踏まえ、上級日本語学習者によるイ形容詞・ナ形容詞・述語名詞の中止形の使用についてコーパス調査を行い、静的述語の中止形全体の使用状況を明らかにしたいと考える。

3. 調査の概要

3.1 調査対象コーパスについて

本稿の調査対象は、「YNU 書き言葉コーパス」である。このコーパスは、横浜国立大学に在籍する日本人大学生30名と、留学生（韓国語母語話者30名、中国語母語話者30名）を対象とし、場面や読み手の異なる12の作文タスクを課したものである。90名×12タスクの計1080編の作文がテキストファイル形式で収められており、量・質ともに均整のとれたコーパスであると言える²⁾。留学生の日本語のレベルは、調査協力者の約7割が日本語能力試験1級（N1を含む）合格者であり、一般には「上級」と称されるレベルである。またそれぞれの作文について一定の基準に基づいて評価が行われており、達成できたタスクの数に応じて、「上位群」「中位群」「下位群」の3つのグループに分けられている。本稿ではこれを上級学習者の中でのさらなるレベル分けと捉え、考察の観点の一つとして用いることとする。

3.2 調査方法

本稿の分析対象は、静的述語の中止形、すなわち、形容詞（イ形容詞・ナ形容詞）及び述語名詞の中止形である。イ形容詞の中止形には、「ク」「クテ」という二つの形式がある。また、ナ形容詞と述語名詞の場合は、「デ」「デアリ」「デアッテ」という形式がある。

データの抽出方法としては、「YNU 書き言葉コーパス」の全作文のファイルに対し、UniDic-mecab ver. 2.1.1によって形態素解析を行い、イ形容詞の連用形、またナ形容詞・名詞に「助動詞ダ 連用形 一般」が接続しているものを抽出した。「助動詞ダ 連用形 一般」には、「～ので／～んで／～のではないか」「～でない／～でなく」など中止形ではないものや、誤解析により抽出された格助詞「で」（例「病院でいる」）などが含まれているため、目視にてそれらを除いた³⁾。調査対象としたものと、それらのUniDicによる品詞タグとの対応について表1にまとめておく。連体形式・例については、村木(2012)を参考にした。なお、津留崎(1999)では、述語名詞のうち「こと」や「もの」といった抽象名詞は調査対象から除かれていたが、本稿では「みそ汁は日常的に食べられているもので」や「その女性の仕事は神様達が使う布を作り出すことで」といった例が、物事の説明として一定数あったため、調査対象として扱い「述語名詞」に含めた。

表1 各品詞の連体形式と形態素解析による品詞タグ

| | 連体形式 | 例 | UniDicによる品詞タグ |
|------|-------------------|----------------------|-------------------------------|
| イ形容詞 | -い | 長-、高- | 形容詞-一般 |
| ナ形容詞 | -な | 静か-、有名- | 形状詞-一般 |
| | -な/-の (格の体系なし) | 様々-、特別- | 形状詞-一般 |
| | -な/-の (格の体系あり) | 自由-、元気- | 名詞-普通名詞-形状詞可能 |
| | -の (格の体系なし) | がらあき- 上々- 大荒れ- | 名詞 形状詞-一般 名詞-普通名詞-形状詞可能 |
| 述語名詞 | -の (格の体系あり) | 町、病院、こと | 名詞-普通名詞-一般 |
| | | ~台 | 名詞-普通名詞-助数詞可能 |
| | | 仕事、刺激、もの | 名詞-普通名詞-サ変可能 |
| | | 一人、日常 | 名詞-普通名詞-副詞可能 |

以上のようにして得られた静的述語の中止形について、津留崎氏が設定した意味的な枠組みである「関係の意味」の観点と、作文タスクの内容の観点を中心に集計・分析を行う。一つめの観点である「関係の意味」とは、「先行節（の中止形の語）が後続節（の述語）の表す事柄に対して、どのような意味を担っているかを言う」（津留崎 2003b, p. 151）と定義されるものである。関係の意味の分類については、次節にて詳細を示す。二つめの観点である作文タスクの内容については、読み手が特定されているかどうか、また特定されている場合の親疎関係（目上か友人か）という違いに注目する。読み手を軸として「YNU 書き言葉コーパス」のタスクを整理すると、表2のようにまとめられる。

表2 「YNU 書き言葉コーパス」におけるタスクの内容

| タスク 番号 | 内容 | 読み手 |
|-----------|----------------------------|--------------|
| 1 | 面識のない先生に図書を借りる（メール） | 特定・疎 （目上） |
| 4 | 学長に奨学金増額の必要性を訴える（メール） | |
| 7 | ゼミの先生に観光地や名物を紹介する（メール） | |
| 10 | 先生に早期英語教育について意見を述べる（メール） | |
| 2 | 友人に図書を借りる（メール） | 特定・親 （友人） |
| 5 | 入院中の後輩に励ましの手紙を書く | |
| 8 | 先輩に起こった事件を友人に教える（携帯メール） | |
| 11 | 友人に早期英語教育について意見を述べる（メール） | |
| 3 | レポートでデジカメの販売台数に関するグラフを説明する | 不特定 |
| 6 | 市民病院の閉鎖について新聞に投書する | |
| 9 | 広報紙で国の料理を紹介する | |
| 12 | 小学生新聞で七夕の物語を紹介する | |

以下、第4節では、4.1概観、4.2関係的意味からみた使用状況、4.3作文タスクの特徴からみた使用状況、4.4学習者のレベルからみた使用状況、4.5学習者に見られた不自然な用例について、の順で調査結果をみていくこととする。

4. 調査結果

4.1 概観

イ形容詞・ナ形容詞・述語名詞の中止形の使用を母語別に比較してみると、表3のようになる。イ形容詞については、宮崎（2016）の調査データに基づく。

表3 静的述語の中止形の品詞別使用回数

| | イ形容詞 | ナ形容詞 | 述語名詞 |
|-----|------|------|------|
| 日本語 | 69 | 39 | 40 |
| 韓国語 | 107 | 32 | 29 |
| 中国語 | 85 | 46 | 45 |

品詞別に使用頻度を比較すると、いずれの母語話者も、イ形容詞が突出して高く、ナ形容詞と述語名詞の使用数はほぼ同数となっている。日本語母語話者と学習者の傾向は似たものとなっているといえる。カイ二乗検定⁴⁾の結果、日本語母語話者と韓国語母語話者とは、イ形容詞については韓国語母語話者が有意に多く、述語名詞については日本語母語話者が有意に多かった ($\chi^2(2) = 9.420, p < .01$)。日本語母語話者と中国語母語話者では、有意差はなかった。なお、「YNU 書き言葉コーパス」におけるイ形容詞・ナ形容詞・名詞の全使用数は、表5に示すとおりイ形容詞が最も少ないが、中止形で用いられる割合は、表4のようにナ形容詞や名詞よりも高くなっているということになる。

表4 品詞別・中止形での使用率（中止形での使用回数÷全使用数）

| | イ形容詞 | ナ形容詞 | 名詞 |
|-----|-------|------|------|
| 日本語 | 10.5% | 3.1% | 0.3% |
| 韓国語 | 12.3% | 3.1% | 0.3% |
| 中国語 | 9.3% | 3.7% | 0.4% |

表5 品詞別全使用回数(形態素解析による集計)

| | イ形容詞 | ナ形容詞 | 名詞 |
|-----|------|------|-------|
| 日本語 | 655 | 1103 | 10999 |
| 韓国語 | 872 | 1032 | 10640 |
| 中国語 | 918 | 1168 | 12006 |

4.2 関係の意味からみた使用状況

ここでは、関係の意味からみた母語別の使用状況を見る。まず、関係の意味の種類とその特徴及び例文を示す。本稿では、津留崎（1999、2000、2003a）における分類を参考にし、「並列」「前提」「先行事態」「原因」「注釈⁵⁾・解説・評価」「副状態」の6つを設けた。

関係の意味のそれぞれの特徴は以下のとおりである。例文は津留崎（1999、2000、2003a）による。

〈並列〉：先行句節と後続句節が意味的に独立し、構文的にも意味的にも対

等な文。互いに入れ替えても意味が変わらない。

①花子は優しくて、明るい。／花子は優しくて、雪子は明るい。

②花子は素直で、明るい。／花子は素直で、雪子はわがままで。

③花子は北海道生まれで、雪子は沖縄生まれです。

〈前提〉：先行句節が主語の全体像としての概要を捉えて前提となり、後続句節において詳細な内容が述べられる文。概略→詳細、全体→部分のような順序性がある。前後を入れ替えると不自然になる。

④花子は顔が丸くて目が大きい。

⑤花子は素直で、よく笑う。

⑥花子は長女で、横浜に住んでいる。

〈先行事態〉：先行・後続句節において述べられるふたつのできごとが継起関係となるもの。形容詞の場合は、時の経過を表す状況語が必要。名詞の場合は、動作を表す名詞が先行節に置かれる。前後の順序を入れ替えると不自然。

⑦花子は合格がとてもうれしく、そのうれしきは喜びに変わった。

⑧花子は北海道生まれで、去年東京に転校した。

〈原因〉：先行句節と後続句節が因果関係を持つ。先行節は原因・条件・根拠となっている事柄をさしだす。前後の順序の入れ換えはできない。

⑨花子は優しくて、皆に人気がある。

⑩花子は心配で、何度も時間を確かめた。

⑪花子は帰国子女で、英語を上手に話す。

〈注釈・解説・評価〉：中止形が後続句節の内容を抽象化してまとめ、主語の特徴としてさしだしたり、原理や関係性（異同・類似・真偽）といった解説を与えたり、語り手の評価を表す。前後を入れ替えると、前件が根拠を表す。

⑫田中先生は厳しくて、忘れ物をするとすぐ廊下に立たせる。(注釈)

⑬花子は従順で、親のいうことをよく聞いた。(注釈)

⑭花子は生意気盛りで、決めたことにいちいち文句を言う。(注釈)

⑮花子はいつもの習慣で、7時には目が覚めた。(解説)

⑯さすがにプロで、花子の作品は見事だ。(評価)

〈副状態〉：主語の動作と平行して、同じ場面に存在する副次的な状態（服装、姿勢、動作、表情、心理状態等）。後続句節の述語は動詞で動作を表す。前後の入れ換えは不可。

⑰花子は声もなく立ちつくしている。

⑱花子は元気で、学校生活を送っている。

⑲花子は終始無言で、手だけを動かしている。

なお、特に学習者の用例のうち、いずれにも分類できなかったものを分類する枠として「不明」を設けた。例えば、次のような例である。

(3) 私が大好きな韓国料理であり、チヂミをご紹介しましたがいかがでしたか？
(タスク9_K009韓国下位群)

以下、集計結果を品詞別に示す。表6はイ形容詞、表7はナ形容詞、表8は述語名詞である。なお、「並列」における（ ）内の数値は「並列」のうち、名詞修飾成分の中に現れた例（「広くてきれいな部屋」「仕事熱心で真面目な青年」など）の用例数である。

表6 イ形容詞中止形の関係的意味別使用回数と使用率（宮崎2016 改編）

| | 並列 | 前提 | 先行 事態 | 原因 | 注釈/解説 /評価 | 副状態 | 不明 | 合計 |
|-----|-----------------|-------------|-----------|-------------|--------------|-----------|-----------|---------------|
| 日本語 | 20(3) (29%) | 10 (14%) | 1 (1%) | 30 (43%) | 5 (7%) | 3 (4%) | 0 (0%) | 69 (100%) |
| 韓国語 | 25(8) (23%) | 13 (12%) | 5 (5%) | 52 (49%) | 10 (9%) | 2 (2%) | 0 (0%) | 107 (100%) |
| 中国語 | 29(10) (35%) | 6 (7%) | 1 (1%) | 36 (44%) | 4 (5%) | 3 (4%) | 3 (4%) | 82 (100%) |

表7 ナ形容詞中止形の関係的意味別使用回数と使用率

| | 並列 | 前提 | 先行 事態 | 原因 | 注釈/解説 /評価 | 副状態 | 不明 | 合計 |
|-----|-----------------|-----------|-----------|-------------|--------------|-----------|-----------|--------------|
| 日本語 | 10(5) (26%) | 1 (3%) | 0 (0%) | 15 (38%) | 12 (31%) | 1 (3%) | 0 (0%) | 39 (100%) |
| 韓国語 | 19(11) (59%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 5 (16%) | 8 (25%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 32 (100%) |
| 中国語 | 18(10) (42%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 20 (47%) | 3 (7%) | 1 (2%) | 1 (2%) | 43 (100%) |

表8 述語名詞中止形の関係的意味別使用回数と使用率

| | 並列 | 前提 | 先行 事態 | 原因 | 注釈/解説 /評価 | 副状態 | 不明 | 合計 |
|-----|--------------|-------------|-----------|-------------|--------------|-----------|-----------|--------------|
| 日本語 | 4 (10%) | 14 (35%) | 0 (0%) | 13 (33%) | 8 (20%) | 1 (3%) | 0 (0%) | 40 (100%) |
| 韓国語 | 2(1) (7%) | 10 (34%) | 0 (0%) | 12 (41%) | 2 (7%) | 1 (3%) | 2 (7%) | 29 (100%) |
| 中国語 | 4 (9%) | 8 (18%) | 0 (0%) | 25 (57%) | 2 (5%) | 1 (3%) | 4 (9%) | 44 (100%) |

小説をデータとした津留崎氏の研究では、次のことが指摘されている。

- ・「前提」「注釈・解説・評価」がイ形容詞述語に特徴的な用法である。
- ・動詞の中止形は修飾成分になるものが多いが、形容詞のデ中止形は陳述成分になるものが多い。
- ・静的述語である名詞述語および形容詞の中止形の用例には、「前提」を表す文が多く現れる。

日本語母語話者については、津留崎氏の指摘のとおり、ナ形容詞では「注釈・解説・評価」の使用が、述語名詞では「前提」の使用が多くなっていた。用例をあげる。

- (4) 具材は家庭によって様々で、納豆などユニークなものを入れる人もいます。(注釈) (タスク9_J004日本語)
- (5) 日本人はとにかくソバが好きで、駅にソバのファストフードスタンドがあったりするほど。(注釈) (タスク9_J022日本語)

- (6) 肉じゃがは、日本の一般的な家庭料理のひとつで、ごはん（白米）によく合うおかず、もしくはお酒のおつまみとして、人気があります。
（前提） （タスク9_J012日本語）

学習者については、特に形容詞において、母語話者よりも「並列」が多くなっているのが特徴的である。それは、名詞修飾成分の中での使用例（「仕事熱心で真面目な青年」）が多くなっていることによる。その点を除けば、いずれの品詞についても、母語話者との大きな比率の違いは見られない。注目すべき点は、学習者にもナ形容詞や述語名詞において、初級で学習する「並列」「原因」以外の「前提」や「注釈／解説／評価」の用例が一定数見られることである。例文を示す。

- (7) ピョンは月の形をしたお餅で、中にはあんこ、溶かした黒砂糖などが入っています。（前提） （タスク9_K010韓国上位群）
- (8) 私自身も一人の学習者であり、言語教育関連の仕事をしたいとおもっていますので、この計画にはとても興味があります。（前提）
（タスク10_C058中国上位群）
- (9) 具材はすごくシンプルでおもちとキャベツ、韓国式のおでんがあればオッケーです。（注釈） （タスク9_K038韓国中位群）
- (10) そして、2008年までは横ばいでずっと60千台という販売台数を維持している。（注釈） （タスク3_C046中国上位群）

これらは、先行句節において概略や特徴を述べ、後続句節で詳細を述べる構造となっており、物事を説明する文として適切なものとなっている。

4.3 作文タスクの特徴からみた使用状況

ここでは、「読み手」の違いによって形式がどのように選択されているか、という形式とタスクとの相関をみる。「読み手」は、先生や学長といった目上の人を対象とする「特定・疎」、友人や後輩を対象とする「特定・親」、そして広報紙や新聞投書のように不特定多数の読者を対象とする「不特定」の三つがある。形式別の使用頻度は次の表9、10、11のようになる。

表9 イ形容詞中止形の読み手別使用回数と使用率（宮崎 2016 改編）

| | 特定・疎（目上） | | 特定・親（友人） | | 不特定 | |
|-----|----------|---------|----------|--------|---------|---------|
| | クテ | ク | クテ | ク | クテ | ク |
| 日本語 | 1（4%） | 24（96%） | 10（91%） | 1（9%） | 5（17%） | 25（83%） |
| 韓国語 | 19（56%） | 15（44%） | 16（84%） | 3（16%） | 35（67%） | 17（33%） |
| 中国語 | 12（50%） | 12（50%） | 10（100%） | 0（0%） | 35（80%） | 9（20%） |

イ形容詞について、「クテ」「ク」の使用比率を見てみると、「特定・疎（目上）」では、日本語母語話者の9割以上が「ク」を使用しているのに比べ、学習者は二形式の使用比率に大きな差はない。「特定・親（友人）」では、いずれの母語話者においても、「クテ」の使用が圧倒的に多い。「不特定」では、日本語母語話者は「ク」の使用が8割を超えているが、学習者は「クテ」の使用が韓国語話者が約7割、中国語話者が8割といずれも高くなっている。なお、カイ二乗検定の結果、「特定・疎」と「不特定」においては、日本語母語話者は学習者に対して「クテ」の使用が有意に少なく、「ク」の使用が有意に多かった（「特定・疎」日韓間： $\chi^2(1) = 15.069$, $p < .01$ 、日中間： $\chi^2(1) = 11.038$, $p < .01$ 「不特定」日韓間： $\chi^2(1) = 17.553$, $p < .01$ 、日中間： $\chi^2(1) = 25.922$, $p < .01$ ）。以上のことから、学習者は、読み手によって二形式を使い分けてはいるが、その比率については母語話者と開きがあることがわかる。

表10 ナ形容詞中止形の読み手別使用回数

| | 特定・疎（目上） | | | 特定・親（友人） | | | 不特定 | | |
|-----|----------|-----|------|----------|-----|------|-----|-----|------|
| | デア | デアリ | デアッテ | デア | デアリ | デアッテ | デア | デアリ | デアッテ |
| 日本語 | 8 | 0 | 0 | 7 | 0 | 0 | 24 | 0 | 0 |
| 韓国語 | 6 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 21 | 0 | 0 |
| 中国語 | 5 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 7 | 0 | 0 |

ナ形容詞について、今回の調査に限っては、いずれの母語話者においても「デアリ」「デアッテ」という形式は現れなかった。

表11 述語名詞中止形の読み手別使用回数

| | 特定・疎(目上) | | | 特定・親(友人) | | | 不特定 | | |
|-----|----------|-----|------|----------|-----|------|-----|-----|------|
| | デ | デアリ | デアッテ | デ | デアリ | デアッテ | デ | デアリ | デアッテ |
| 日本語 | 3 | 0 | 0 | 5 | 0 | 0 | 24 | 8 | 0 |
| 韓国語 | 5 | 6 | 0 | 2 | 0 | 1 | 16 | 4 | 0 |
| 中国語 | 8 | 5 | 0 | 0 | 1 | 0 | 20 | 7 | 0 |

述語名詞については、日本語母語話者と学習者には違いが見られた。まず、「特定・疎(目上)」「特定・親(友人)」においては、日本語母語話者は「デアリ」「デアッテ」をまったく使用していない。一方、学習者には、「特定・疎(目上)」で複数の使用が見られた。例をあげる。

- (1) 現在、円高であり、留学生の中でバイトなどでちゃんと勉強の時間を取れない人が多いそうです。(タスク4_K023韓国下位群)
- (2) 韓国はおいしい、美しい料理いっぱいの国であり、その一人(→ひとつ)を選ぶのもすごく悩んで、つらかったです。(タスク9_K034韓国中位群)
- (3) 北京は中国の首都であり、“故宮”や“萬里の長城”などありますし、“北京ダック”のような食べ物もいっぱいあります。(タスク7_C036中国下位群)

このことから、学習者には目上の人を書く文体として「デアリ」を選択する傾向があることが窺える。

次に、「不特定」においては、日本語母語話者・学習者ともに「デアリ」が使用されており、形式ごとの使用の割合も母語話者間で大きな差はない。しかし詳細を見てみると、日本語母語話者が使用した「デアリ」の8例は全て「タスク6」に現れたものであった。「タスク6」とは、「閉鎖が検討されている市民病院の存続を求める意見文を、新聞に投書する」というものであり、読み手は不特定多数が想定され、新聞の投書らしい文体が求められる課題である。用例をあげる。

- (14) 市民総合病院の存続問題は命に直接関わる問題であり、また町に住む

人々の元気、活気にも関わる問題でもあるのです。

(タスク 6_J018日本語)

- (15) この病院に入っている産婦人科、リハビリテーション科は近隣の町にはないものであり、もしこの病院がなくなってしまうとなると、困る人々が沢山いることは、考えずとも分かりそうなものである。

(タスク 6_J028日本語)

一方、学習者の場合は、「タスク 6」に限らず他のタスクにも使用があった。よって、学習者は母語話者と異なり、「デアリ」の使用には、新聞への投書としての文体は影響していない可能性がある。

以上のように「デアリ」の現れ方は日本語母語話者と学習者で異なっており、どのような場面で「デアリ」を用いるか意識に違いがあることがわかった。この項目に関しては、さらにデータ数を増やして文末の「である体」の使用とともに調査する必要がある。

4.4 学習者のレベルと中止形の使用

ここでは、学習者のレベルと中止形の使用の相関関係をみてみる。まず、品詞別の使用頻度を表12に示す。

表12 品詞・レベル別使用回数

| | イ形容詞 | ナ形容詞 | 述語名詞 |
|-----|------|------|------|
| 上位群 | 68 | 37 | 29 |
| 中位群 | 60 | 25 | 32 |
| 下位群 | 61 | 16 | 14 |

イ形容詞についてはグループ間で使用数にあまり差はないが、ナ形容詞・述語名詞に関しては、中・上位群での使用数が増加している。

次に、表13により品詞・形式・レベル別に使用頻度を見てみる。

イ形容詞については、いずれのグループも「ク」より「クテ」の使用が多いが、上位群になるほど「ク」の使用率が高くなっている。宮崎 (2016) において、カイ二乗分析でも有意差が認められている ($\chi^2(2) = 17.841, p < .01$)。ナ形容詞については、いずれのグループも「デ」の使用のみであった。述語名詞については、「デアリ」が使用されているが、その比率にグループ間に

表13 品詞・形式・レベル別使用回数と使用率

| | イ形容詞 | | ナ形容詞 | | 述語名詞 | |
|-----|-------------|-------------|--------------|-----------|-------------|------------|
| | クテ | ク | デ | デアリ | デ | デアリ |
| 上位群 | 39 (57%) | 29 (43%) | 37 (100%) | 0 (0%) | 20 (69%) | 9 (31%) |
| 中位群 | 35 (58%) | 25 (42%) | 25 (100%) | 0 (0%) | 24 (73%) | 9 (27%) |
| 下位群 | 54 (89%) | 7 (11%) | 16 (100%) | 0 (0%) | 9 (64%) | 5 (36%) |

大きな差はない。今回の調査結果では、イ形容詞においてのみ、形式の使い分けにレベル差との相関が確認された。

次に、関係的意味別の集計結果を表14、15、16に示す。

表14 イ形容詞中止形の使用回数・使用率と日本語レベル(関係的意味との相関)

| | 並列 | 前提 | 先行事態 | 原因 | 注釈/解説/評価 | 副状態 | 不明 | 合計 |
|-----|-------------|------------|-----------|-------------|-----------|-----------|-----------|--------------|
| 上位群 | 12 (19%) | 9 (14%) | 4 (6%) | 31 (48%) | 6 (9%) | 2 (3%) | 0 (0%) | 64 (100%) |
| 中位群 | 19 (32%) | 7 (12%) | 2 (3%) | 25 (42%) | 5 (8%) | 2 (3%) | 0 (0%) | 60 (100%) |
| 下位群 | 19 (31%) | 3 (5%) | 0 (0%) | 32 (52%) | 3 (5%) | 1 (2%) | 3 (5%) | 61 (100%) |

表15 ナ形容詞中止形の使用回数・使用率と日本語レベル(関係的意味との相関)

| | 並列 | 前提 | 先行事態 | 原因 | 注釈/解説/評価 | 副状態 | 不明 | 合計 |
|-----|-------------|-----------|-----------|------------|------------|-----------|-----------|--------------|
| 上位群 | 19 (56%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 9 (26%) | 6 (18%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 34 (100%) |
| 中位群 | 11 (46%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 9 (38%) | 3 (13%) | 0 (0%) | 1 (4%) | 24 (100%) |
| 下位群 | 6 (38%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 8 (50%) | 1 (6%) | 1 (6%) | 0 (0%) | 16 (100%) |

表16 名詞中止形の使用回数・使用率と日本語レベル（関係の意味との相関）

| | 並列 | 前提 | 先行 事態 | 原因 | 注釈/解説 /評価 | 副状態 | 不明 | 合計 |
|-----|------------|------------|-----------|-------------|--------------|-----------|-----------|--------------|
| 上位群 | 2 (7%) | 9 (32%) | 0 (0%) | 14 (50%) | 3 (11%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 28 (100%) |
| 中位群 | 4 (13%) | 4 (13%) | 0 (0%) | 19 (59%) | 1 (3%) | 2 (6%) | 2 (6%) | 32 (100%) |
| 下位群 | 0 (0%) | 5 (36%) | 0 (0%) | 8 (57%) | 0 (0%) | 0 (0%) | 1 (7%) | 14 (100%) |

先行研究で指摘されていた静的述語の中止形の特徴である「前提」「注釈・解説・評価」に注目して見てみると、「前提」はイ形容詞において、また「注釈・解説・評価」は、イ形容詞・ナ形容詞・述語名詞の全てにおいて、下位群に比べ上位群で使用の割合が増えている。文法項目としては明示的に取り上げられることのない「前提」「注釈・解説・評価」の用法が、上位群での使用数が増加し、母語話者の傾向と近くなる過程が窺えることは、学習者が読解素材などによる様々な日本語のインプットを通して、中止形使用の特徴を捉えていっていることが示唆されるのではないだろうか。今回の調査では、収集した用例数が少なく統計的なことは示せなかったため、引き続きデータを補充しさらに調査をする必要がある。

4.5 学習者に見られた不自然な用例について

ここまで、上級日本語学習者の静的述語中止形の使用について、日本語母語話者と概ね傾向が似ていることを観察してきた。しかし、データの中には、関係の意味が判断できない文、また、関係の意味は推測できるが日本語として不自然な用例が観察された。ここでは、ナ形容詞と述語名詞を中心に取り上げる。

まず次の(16)(17)は、関係の意味は「原因」だと推測できるが、後続句に働きかけの表現が来ているため不自然になっているものである。日本語母語話者にこのような例は見られなかった。

- (16) 実は今書いている論文にはこの本が必要で、貸してくれないか？
(タスク 2_C010中国中位群)

- (17) 上でも話したように、ピクニックに行くと食事として食べるもので、皆さんも今週末に出掛ける時ギンパブを作って行きましょう！
(タスク9_K009韓国語上位群)

また、次の例は、娘が「きれいであること」と「織姫という名であること」を並列させているが、連体修飾節内に中止形を用いたことで非文法的になっている。

- (18) 天帝にはとつてもきれいで、「織姫」という娘がいます。
(タスク12_C010中国上位群)

また、次のような例もある。

- (19) 二人は、別れの悲しみをたえず、毎日泣くことばかりでした。仕事をせず泣きばなしで (→泣きっぱなしで)、空国の王は、仕事を頑張ると、一年一回は二人を合わせてくれると約束しました。
(タスク12_C026中国下位群)

先行句節の「(二人は) 泣きっぱなしで」は、後件に同主語の動作がくれば、「副状態」として解釈される。しかし、例文は主語が「王」に変わり、述語は「約束しました」となっている。「泣きっぱなし」と「約束する」ことが因果関係としてつながりにくいため、すぐに「原因」と解釈するのが難しくなっている。

このように、中止形を使って複数の事柄を違和感なく並べるのは、単純なことではない。完全な誤用とまではいかないまでも、不自然な用例について観察し、傾向を探ることは上級日本語学習者に対する文法教育を考えるうえで必要なことであると思われる。

5. まとめと今後の課題

本稿では、上級日本語学習者による形容詞および述語名詞の中止形について、「YNU 書き言葉コーパス」を調査対象とし、日本語母語話者と比較しながら使用状況について分析を行った。調査の結果、以下のような点が明らか

かになった。

- 1) イ形容詞・ナ形容詞・述語名詞の使用頻度は、日本語母語話者・学習者に関わらずイ形容詞が最も多く、ナ形容詞と述語名詞はほぼ同じ頻度で現れていた。よって、使用頻度については母語話者と学習者の傾向に大きな差はないといえる。
- 2) どのような関係の意味で用いられているかについては、日本語母語話者は学習者に比べ、「前提」や「注釈・解説・評価」の使用の割合が高い傾向があった。学習者は「並列」、特に規定成分のものが多くことが観察された。ただしいずれの品詞についても、初級では文法項目として取り上げられてはいない「前提」や「注釈・解説・評価」の用例がある程度観察された。上級学習者は、これらの用法を適切に使用している。
- 3) 形式とタスクの関連については、読み手の違いとの相関性が見られた。イ形容詞の「ク」「クテ」の使い分けは、日本語母語話者・学習者ともに「特定・疎（目上）」の場合の「ク」の使用が多くなるが、母語話者は特にそれが顕著であり使い分けが徹底されている。また名詞述語の「デ」「デアリ」の使い分けについて、母語話者は、「不特定」のうち、「新聞への投稿文」というタスクにのみ使用されていたが、学習者は広範囲のタスクで使用しており、特に読み手が目上であるタスクでの使用が特徴的であった。
- 4) 学習者のレベルとの相関について、イ形容詞の形式の使い分けに関しては、中・上位群は下位群に比べ「ク」形式を多く用いるようになることが確認された。また関係意味別にみたところ、静的述語中止形の特徴ともいえる「前提」や「注釈・解説・評価」といった用法の割合が上位群になるほど増える傾向が見られた。

今回、特にナ形容詞と述語名詞については、コーパス中の使用数が限られていたことは否めない。「YNU 書き言葉コーパス」以外の学習者コーパスについても調査をし、統計的な有意差が確認できるかを追跡調査したいと考える。また、初級学習者・中級学習者のデータについても収集し、中止形の習得過程を見ることについても今後の課題としたい。

注

- 1) 蓮沼・有田・前田 (2001) では、「名詞述語の場合は、「名詞+デ」のデが、ダのテ形なのか、原因を表す格助詞のデなのか区別しにくいことが多く、その違いも連続的である」(p. 123) との指摘がある。
- 2) 母語別の総形態素数は日本語母語話者が79447、韓国語母語話者が81356、中国語母語話者が88828である。
- 3) 中村・伝 (2008) では、MeCab における品詞同定の形態素解析誤りは、助詞・助動詞間の品詞誤り (例えば、助動詞「だ」の連用形であると解析すべきところを、格助詞であると解析してしまう誤り) が最も多く品詞同定誤りの中の 1 / 3 を占めるとしている。
- 4) js-STAR (<http://www.kisnet.or.jp/nappa/software/star/index.htm>) を利用。
- 5) 津留崎 (1999、2000) においては、「抽象」という用語が用いられているが、津留崎 (2003a) にて「注釈」という用語に改められているため、本稿では「注釈」を用いる。

調査資料

YNU 書き言葉コーパス (金澤裕之 (編) (2014) 『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』ひつじ書房)

参考資料

『テーマ別 中級から学ぶ日本語』研究社
『みんなの日本語 初級 I・II 本冊』スリーエーネットワーク

参考文献

庵功雄・宮部真由美 (2017) 「正確で自然な複文の組み立て方」『わかりやすく書ける作文シラバス』 pp. 57-73 くろしお出版
木下謙朗 (2009) 「書き言葉における形容詞の使用状況—学習者と母語話者の比較—」『明海日本語』第14号 pp. 37-48 明海大学日本語学会
佐藤里美 (1997) 「名詞述語文の意味的なタイプ—主語が人名詞のばあい—」『ことばの科学 8』 pp. 151-212 むぎ書房
中村純平・伝康晴 (2008) 「言語処理学会 第14回年次大会 発表論文集」

pp. 73-76

津留崎由紀子 (1999) 「名詞述語の中止形デの機能」『人間文化論叢』第2巻
pp. 109-119 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

津留崎由紀子 (2000) 「ナ形容詞のデ中止形の構文的機能」『人間文化論叢』
第3巻 pp. 181-191 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

津留崎由紀子 (2003a) 「形容詞の中止形を用いた複文における先行句節と
後続句節の関係」『日本語科学』13 pp. 7-32 国書刊行会

津留崎由紀子 (2003b) 「日本語教育における中止形の指導と日本語研究」
『国文学 解釈と鑑賞』68(7) pp. 144-152 至文堂

津留崎由紀子 (2004) 「〈前提〉を表す述語名詞および形容詞の中止形」『千
葉大学留学生センター紀要』第10号 pp. 41-61

仁田義雄 (1995) 「シテ形式をめぐって」『複文の研究 (上)』 pp. 87-126
くろしお出版

橋本直幸 (2015) 「書き言葉コーパスから見た文法シラバス」『データに基づ
く文法シラバス』 pp. 67-86 くろしお出版

蓮沼昭子・有田節子・前田直子 (2001) 『日本語文法 セルフマスターシリー
ズ7 条件表現』くろしお出版

宮崎聡子 (2016) 「上級日本語学習者による形容詞中止形の使用状況—「YNU
書き言葉コーパス」の調査を通じて」『日本語／日本語教育研究』7
pp. 109-124 ココ出版

村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房

(国際教育リエゾン機構 非常勤講師)